



TITLE:

女子労働問題(一)

AUTHOR(S):

河田, 嗣郎

CITATION:

河田, 嗣郎. 女子労働問題(一). 経済論叢 1919, 8(3): 323-336

ISSUE DATE:

1919-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/127504>

RIGHT:

女子勞働問題（二）

河田 嗣 郎

一 一般婦人問題と女子勞働問題

女子勞働問題の意義を知らんとせば、一方に於ては一般的に勞働問題なるものの意義を知るを要すると同時に、他方に於ては又一般的に婦人問題なるものの意義を知らなければならぬ。蓋し女子勞働問題は一面に於ては廣き勞働問題の一分岐たると同時に、他面に於ては廣き意味の婦人問題中に包含さるるものなるが故である。けれども其の緣故の親疎より言へば、女子勞働問題は之を一般的に觀たる勞働問題の中に於て講究するを寧ろ適當とし、そは廣義の婦人問題中に包含さるるとは云へ、唯だ之れ女子に關する問題なるが故に然るものたるに過ぎずして、問題本來の意義より言へば所謂婦人問題と女子勞働問題とは頗る面目を異にし僅かに共通なる性質を有するものたるに過ぎぬ。

婦人問題といへば婦人が社會に對して人として男女對等の權利の承認を求め、因襲的なる束縛に對して解放を求め、且は又職業の選擇に關して男女間の機會均等を求むるに就いての問題で、之に關する運動を婦人運動といふのである。されば之れ謂はば婦人の人權に關する問題である。然るに女子勞働問題に至つては唯之れ勞働者たる女子に關して其の勞働條件の緩和改善を計り、

其の労働者としての地位を向上せしめ、乃至は又労働者一般の資本に對する解放を希望するに就けての問題たるに外ならぬ。斯るが故に婦人問題と女子労働問題とは概念としては寧ろ別個のものであるが、女子労働問題が労働問題中特に女子に關係するものであり、女子としては一般婦人問題に關係なきを得ざる所よりして、両者は多少共通なる性質を具有するを避け難く、之が爲めに女子労働問題は同じく労働問題であり乍ら一般的に觀たる労働問題中に在りて、多少特異の性質を有し、問題として特殊の取扱をせなければならぬ所ある次第である。

仍て少しく一般的に觀たる婦人問題なるものと、女子労働問題との異同につきて致ふるに、前者は婦人が人としての權利要求に關するものであるから、謂はば之れ人權問題で其の運動は人權運動である。故に之は一般的に社會生活に關係して表はれ、或は法律上の地位に關して、或は政治上の權利に關して、或は教育上の待遇に關して、或は職業の自由及び選擇に關して、諸種の方面に其の發露を見るのである。而して之は常に男子に對する問題として表はれ、法律上男子と同一の地位を占めむことを要求し、政治上男子と同一の權利を享有せむことを要求し、教育上男子と同等の待遇を受けむことを要求し、又職業上に於ても男子と同一に就職の自由を有し同一様の活動を爲し得むことを要求するのである。要するに之れ社會生活上に於ける男女の區別を除去し、從來因襲的に女子が男子よりも劣等のものとせられ、其の社會上の待遇を異にし、其の自由の束縛せられたるに對して、同一様の待遇と同一様の自由との與へられんことを要求するを以て其の本旨とするものである。其の運動が常に男子に對する女子の解放運動として知らるるは之が爲めであ

る。而して又更に婦人問題に在りては、之に與はり其の運動の任に當る者が大抵は社會の上中流に位する人々であつて、それが男子なると婦人なるとを問はず、教育ある人々、資産ある階級に屬する人々に依りて問題は提起唱道せられ、運動は行はるるのである。されば婦人運動は普通に中等階級に於ける運動として知られ、又は有産階級ブルジョアジに於ける運動として知らるる次第である。

然るに女子勞働問題に至つては、それは決して一般的に女子の人格に關する問題ではなく、廣き婦人問題が純文化的のものなるに反して、之は頗る經濟的のものである。即ち女子勞働問題は勞働者たる女子の地位及び境遇に關する問題であつて、勞賃、勞働時間、勞働上の設備其他一般的に勞働條件を改善し、女子勞働者の地位を進めんとするを以て其の本來の意義と爲し、又場合によりては資本主階級に對する勞働者階級一般の解放を計り、其の境遇を改善し又之に依る經濟及び社會組織の革新を企圖するものである。されば其の運動は所謂勞働運動の一分派たるに過ぎぬ。

従て問題は決して多く男女の區別に重きを置かず、資本主義は企業家階級に對する勞働者階級といふ階級的區別に重きを置くものである。その意味に於ては一般婦人問題が文化的なるに反して此は頗る社會的である。けれども女子勞働問題は一般勞働問題の一分岐なりとはいへ、それが女子勞働者に關する特別の問題なるが故に、其の性質が大體に於て一般勞働問題と共通なるに拘らず多少は又特異の性質を有し、對男子的の意義を有する所なきにあらざるとは之を知らなければならぬ。即ち例へば女子勞働者も同一様の勞働に従事し同一様の能率を發揮するからには男子と同額の勞賃を取得す可きものなりと主張するが如き、又或は職工組合に關し其の組織及び加入は

男女の間に區別の立てたる可きにあらざるを主張し、乃至は男子の職工組合に對して女子の組合も亦對等の地位の認めらる可きを要求するが如きは、同じ労働者といふ中に在りても男女の區別より來る地位及び待遇上の差別を除去せんとし、從て問題が男子に對する意味合を有て居る。此事は女子労働問題が廣き労働問題の一分岐たるに拘らず、同時に又廣き婦人問題と共通の性質を有し、その一分派と見られなければならぬ理由である。最後に女子労働問題に與はり其の運動に當る者は固より之れ労働者たる女子を本とし、其の運動は實に労働者階級又は無産階級プロレタリアの運動である。此點に於ても一般的なる婦人運動とは其の性質を異にする。けれども此の運動に對しては屢々智識階級の人々や有産階級の人々の参加を見るのであつて、決してそれは純粹なる労働者階級の運動とは謂ひ難い。唯併し乍ら智識階級や有産階級の人々の参加を見るは、やはり之れ一般労働運動に於けると同じく、唯だ運動の指導の爲めにせらるるものたるに過ぎずして、問題の本幹と運動の本流が労働者階級に存するの事實は毫も之が爲めに傷けらるるものではない。

一般婦人問題と女子労働問題との異同を述ぶるに就けて一言附け加へて置かなければならぬ事は女子労働問題なるものは同じく之れ女子の經濟活動に關する問題なりとはいへ、彼の婦人職業問題なるものとは少からず其の性質を異にすることである。婦人職業問題なるものは、婦人が男子と對等の地位に立ちて職業を選び之を獨立なる職業として行ひ、社會上此點に於ても亦男子と均等なる機會を得んとするより生ずるものであるから、其の職業なるものは所謂自由職業に屬する職業を意味するのである。即ち醫師になるとか辯護士になるとかいふが如き之である。若し

雇傭關係の下に在るものありとするも、それは女教員になると云ふ種類のものである。然るに女子勞働問題は之と異り、女子が普通の肉體的勞働に於て企業家に雇傭せられ又は家庭に雇傭せられ、之を自由なる職業と爲すに非ずして唯單に其の勞働を賣るに就けての問題である。されば婦人職業問題なるものは當然かの一般的なる婦人問題中に於て取扱はる可きもので、問題としては所謂中等階級に關する問題である。女子勞働問題が所謂勞働者に關する問題として、一般勞働問題の一分派を爲すとは頗る其趣を異にして居る。論者中には婦人職業問題の意味を廣く解釋して、其中には自由職業に關するものも、所謂勞働に關するものも共に之を包含せしめんとする者もあるやうであるが、此の意味に於ける婦人職業問題中には自由職業に關する中等階級的の問題と普通の勞働に關する勞働問題的なるものと、兩者互に性質を異にする二個の問題の含まれたるを見通してはならぬ。然し吾人は婦人職業問題の意義を斯く立するよりも、職業問題たるからには、それは獨立なる職業、自由職業を意味するものとして、之に關する問題は普通の雇傭勞働に關する勞働問題の一分派たる女子勞働問題とは別個のものと爲し、兩者を對立せしむるを以て優れりと爲す者である。從て吾人が本論に取扱ふ所の問題は彼の婦人職業問題にはあらずして、唯だ彼の勞働問題の一分派としての女子勞働問題に限られたるを此所に斷つて置く次第である。

右述ぶるが如くなれば、一般的に觀たる婦人問題及び婦人運動と、女子勞働問題及び女子勞働運動とは、別個の問題にして又別個の運動なりと見るを適當とする。併し乍ら兩者は別個のものではあるけれども然も互に關聯し共通なる性質をも具有するものたるを忘れてはならぬ。從て兩

者は時に同一目的の爲めに共同の運動を試むることが少くない。即ち兩運動は其の各の目的よりして現存の社會組織の缺典を認め、之に對して不満を懷き之が改革を希望する點に於ては志を同するものであつて、選舉權獲得に關する運動の如きに至つては之を共にし相携へて進まんとするものである。而して女子労働運動に至つては近者社會主義的傾向が一般労働運動に於て著明なるに至りたる勢に結び付きたるが爲めに、俄かに廣き又堅固なる地盤を占むるを得るに至り、運動の武歩大いに進捗するを見ることとなつた。彼の市民的なる一般婦人運動が百年を要したる可きものを、社會主義的なる女子労働運動は二三十年間にして成就し終つた。蓋し前者の主張する婦人の人權に關する稍々空虚なる要求は、後者が絶叫する労働自由の要求の如く痛切悲懷なるを得ないからである。尙ほ又労働者の間に在りては男子といはず女子といはず團結運動の必要を感ずること大なれども、中等階級の間には寧ろ個人主義的傾向の強きが爲めに、現今の時勢の下に於て前者は速かなる成功を收め得るに拘らず、後者の發達は遅々たるを免れ難いのである。¹⁾

二 婦人問題及び女子労働問題の起原

女子労働問題の意義は右述ぶるが如きものなりとして、扱て進むで其の問題の起原に就きて攷ふるに、之を究むるが爲めには又一般婦人問題の由て起れる源をも併せ見なければならぬ事情がある。蓋し兩者は別個の問題たる乍ら又共通の性質を有する所あり、從て其の原因に於ても兩者之を同するものが少くないからである。

1) B. S. Hutchins, Women in Modern Industry, London 1915, PP. 175, 195 a. 200; Ellen Key, Die Frauenbewegung, S. 36-39

一般的に觀たる婦人問題の起原に就きて見るに、其の原因は社會的事情の變化や經濟組織の變革やに存する所大なると同時に、精神的方面に存する所亦大なるを先づ以て了解せなければならぬ。即ち原因は外界の事情にも存するけれども、唯之れのみを見て其の原因を尋ねる者は終に徹底の見解に達し難い。その原因が婦人の内心の要求に存する所の大なるや、必ず之を認めなくてはならぬ。之と外界の事情就中特に經濟上の事情とが相結び、内心の要求は此の外界の事情に依りて發露の手懸りを得、又之を基礎として實行力と變ずるを得たのである。然らば其の婦人の精神的要求が那邊に存し、又それが如何にして養はれ來りたるかといへば、即ち之れ十八世紀此方に於ける一般的啓蒙の賜であると謂はねばならぬ。

十七世紀より十八世紀にかけて英國に於て發芽し佛蘭西に於て其花を開きたる啓蒙運動は、一般文化の進歩の上には洵に著明なる貢獻を爲した。此の運動に依りて、宗教上や哲學上や道德上や科學上に於ける研究の結果造り上げられたる世界觀や人世觀は、廣く世に普及せらるることとなり、人心一般に其蒙を啓きて事理の真相を解得するに至り、人生本來の意義が新智識の明鏡に照して考察せらるるに至れるのみならず、引きては終に社會制度に關する諸般の事實に至るまで悉く理智的批評の的に供せられ、總て事物を赤裸々に觀察して其の真相を捕捉し、正しきを正しとし善きを善とし、正と邪と善と惡と美と醜と、悉く皆之を批評的に分解してしまはなければ已まない氣運を見るに至つた。此の氣運の爲めに人生の事と社會の事とは無遠慮に批評せられて、從來因襲的に神聖にせられ尊重せられたるものも、多くは社會の耳目の前に其の本性を暴露

2) L. Becker, Die Frauenbewegung,—Betrachtung, Probleme, Organisation. Kempten und München 1911. S. 13.

せらるることとなつたのである。

之が爲めに、一般的に人の人としての價值や社會制度の價值の如きも、頗る理智的に評價せられ、社會組織に關する改革運動の如きも先づ社會改革派の哲學者達によりて、次では社會主義者等に依りて唱道せらるるに至つたが、之と同時に婦人の人格の尊重に關し、又その社會的地位に關しても、大いなる思想上の運動を見るに至つた。即ち從來婦人がただ女性なるが爲めに輕蔑せられ、人として男子よりも一段劣れるものと評價せられ、其の家庭及び社會に於ける地位は常に男子の下位に置かれたるのみならず、職業や勞働に關しても常に男子專制の下に立ちて束縛を被り虐待を受け來りたるを以て、事理に合せざる不都合の制度と爲すに至り、婦人も苟も人たる限りは、人として男子との間に差別ある可き筈なく、其の地位に高下ある可き筈なく、又其の能力を發揮して業を行ひ勞働を爲すが上に、唯だ女性なりと云ふだけの理由により能力の問題を離れて差別的待遇を受く可き理なしとして、人格上に於ける男女の同權は要求せられ、從て法律上、政治上、社會上、經濟上あらゆる人生の方面に於て、男女地位の對等と機會の均等とが要求せらるるに至つたのである。されば一般的婦人問題の起原は先づ第一に啓蒙運動の賜にして一般的に行はれたる啓蒙の結果に存すと觀なければならぬのである。即ち人が理性的に人生の意義を考へ人格の價值を思ひ、社會制度を解剖的に攷察し、社會組織の正邪善惡を批評的に講究するに至れば、古來男女間に設けられたる後天的差別と、之に伴ふ待遇の厚薄に對して疑問を抱き、其の理由なきを見るに於て、其の非理を發き其の改善を主張するに至るは、已むを得ざる所である。特

に婦人自身に於て其の要求の大なるを見るに至るは、謂はば當然至極の事である。一般的啓蒙の行はれて婦人問題の起るは、毫も不思議なことでない。⁸⁾

右の如く一般的啓蒙に由りて起れる婦人問題が、其後女子教育（然かも理智啓蒙教育）の益々廣く益々深く行はるるに至れると共に、益々其の意義を擴め又深くし來れるは言を俟たぬ。

次に婦人問題の起原の求めらる可き有形的方面としては、生産状態の革新されたる結果として家庭内に於ける婦人勞務の減少し其力に餘裕の生じ來りたる事實を考へなければならぬ。即ち一般に自給經濟の行はれ家庭を以て生産及び消費の單位と爲したる時代に在りては、女子は多く家庭内に於ける生産勞務に使役せられ、或は農業的勞務に於て或は手工業的勞務に於て男子と共に勞務に服せざる可らざるのみならず、一家の消費を整ふる上に於ても婦人の任務は洵に繁忙なるものであつた。然るに自給經濟組織の漸次崩解して交易經濟組織の出來上り、生産は主として市場の爲めにする生産たるに至り、特に諸種の機械の發明により大工業經營の漸次盛に行はるるに至りてよりは、家庭内に於ける生産業務の益々縮少せられ、之と共に婦人の力が家庭内に於て餘裕を見出すに至りたる事實は、婦人問題を發展せしむるには洵に都合よき物質的條件を爲した。此の産業組織の變革に依りて婦人は其力に餘裕を見出すに至りたるが爲に、中流以上の家庭に於ける婦人の如きは家庭に座して無爲に日を送るを以て快しとせず出でて社會に其力を活用せんとせば、能く之を爲し得る状態に在つた。然れども若し一方に於て精神的啓蒙の行はるることなく、婦人は依然として舊の如く盲目的服従と因襲的生活に安するの外多く何物をも求めざる有様であ

8) 此所には唯だ簡単に之れだけを述べて置く。詳しくは拙著「婦人問題」を参照せられたし。

つたならば、家庭内に於て其方に餘裕を見出すに至るとも其の餘裕は其儘に利用さるるなくして婦人はただ家庭内に在りて遊惰に日を送り、中流以上の者の多くは Sexual Parasitism に陥り現今娼妾に之を見るが如き状態に陥つたであらう。然るに幸にも一方に既述の如く一般的啓蒙の氣運大いに動き婦人も亦其の恵に浴したるが爲めに、家庭内に於て餘裕を見出し得たる力は之を家庭外に出でて社會的に活用せんとせらるるに至つたのである。而して精神的方面に於ける啓蒙の一般的に行はれ來りたる時代と物質方面に於て大いなる生活上の變動起り所謂産業革命の成就さるるに至りたる時代とは大抵時を同うし兩者は互に關聯して表はれたる時代的變化なりしが爲めに、有形的に餘裕を見出し得たる力は輒ち社會的に活動するに至つた次第である。⁴⁾

斯くて輒ち十九世紀に於ては、歐洲諸國特に英吉利の如き先進國に於て婦人問題の弗々と表はれ漸次發展し來りて、大いなる運動の行はるることとなつた。此の事情は即ち彼の婦人問題なるものが主として中流以上の婦人に依りて提起せられ、其の運動が文化的運動として主として又中流以上の婦人に依りて行はるる理由を語るものとして、甚だ興味ある所である。而して是に因りて觀るも一般婦人運動に於ては精神的要求が其の主動力を爲し、經濟的事情はただ其の運動をして可能ならしめ又其勢を助くる條件的原因を爲すものたるを知ることが出来るのである。吾人が曩に、女子労働問題が主として經濟的問題たること異り一般婦人問題が主として文化的問題なりと言ひし所は、這邊の事情と併せ考ふ可きものである。

扱て右は一般婦人問題の起原に關しての議論であるが、進むで女子労働問題の起原如何と見る

4) O. Schreiner, Woman and Labour, London, chaps. I. II. III.
E. Key, a. a. O. S. 39.

に、其の起原に至つては両者は大抵同様の事情に基くものたるを知ることが出来る、唯だ一般婦人問題が廣く文化に關する問題たるに反して女子勞働問題は主として經濟に關する問題なれば、前者が其の起原を主として精神方面に置くに反して後者が其の起原を主として經濟方面に置くことと、後者は又一般勞働問題の一分派たれば、其の起原も亦一般勞働問題と之を同するもの少からざるを忘れてはならぬ。

一般勞働問題が其の起原を彼の産業革命以後に於ける大企業組織の發展に因る雇傭勞働の盛行に置くが如く、女子勞働問題も亦此の事情の下に於ける女子勞働の雇傭廣く行はるるに至りし事實に其の起原を發するや言を俟たぬ。而して女子勞働問題は又彼の一般婦人問題に於けるが如く産業革命以後女子の家庭内に於ける勞務の減じ其方に餘裕の生じ來りたる事情に負ふ所大なるものである。即ち産業革命の行はれて家庭的自給經濟の崩解せしが爲めに女子は家庭内に於て力に餘裕を見出したるに際して、下層階級に於ける婦女子は一方には精神的啓蒙に依る新要求を感ずると上中流の婦人に比して少きに、他方に於ては其の家庭は生活の資源を家庭以外に求め、他人の企業に雇はれて所得を之に求めざる可らざるの必要に迫られ來れるが爲めに、輒ち婦女子は出でて其力を他人の企業に賣り以て自家の所得を補助するか、然らざれば由りて以て自ら生活せざる可らざるの事情に陥つて來たのである。斯くて即ち産業革命の行はれたる結果、婦女子の力が家庭内に餘り來れるの事實と家庭外に於ける企業が雇傭勞働を多量に需要するに至れる事實とは、茲に都合よき適合を見、多くの婦女子が勞働者として企業に使用せらるることとなつた。⁵⁾此の事

5) H. M. Swanwick, The Future of the Women's Movement, Londons 1914. PP. 9-10; E. Key. a. O. S. 3yeg.

實は聽て之れ女子労働問題の起り來る素地を作れるものであつて、一般的啓蒙と産業革命との行はれたるが爲めに上中流階級に屬する婦人は社會に向つて精神的要求を齎し、下層階級に屬する婦人は又産業革命の結果社會に出でて其力を物質的に利用するに至り、其の利用の條件に關して種々の要求を齎すに至つた次第である。一が主として文化的にして他が主として經濟的なる亦當然の傾向と謂ふ可きである。

我國の事情は、文明一般の進歩の著しく遅れたるだけ、此種の問題に關しても事情は半世紀乃至一世紀ばかり遅れて居るのであるが、然かし明治維新以後に於ける一般の啓蒙と産業上の變革とは終に一般婦人問題と女子労働問題と共に之を發露せしめずしては己み能はざることとなつた唯併し乍ら文明一般の程度の進めるものと然らざるものと、個人主義的氣風及び制度の確立されたる所と尙ほ未だ家族主義的氣風及び制度の多く殘存せる所とに於ては、問題の表はれ方の異り又多少其の原因に就きても別個の觀察を要するものがある。例へば女子労働問題の原因に就きて觀るも、我國に於て下層階級の婦女子が企業的労働に従事する理由は、多くは以て一家の所得の補充を得んが爲めか、然らざれば婦女子自身が結婚の費用の一部分を造らんが爲めにするに存し婦女子自身が自己一個の生活を支へんが爲めにするものは至つて少い。然るに歐米の如く個人主義的なる國に在りては自己の生活の爲めにする者が我國に於けるよりも遙かに多數なる可きや想像し易き所たるのみならず又事實の證明する所である。次に又歐洲の諸國に於けるが如く男女人口の區別に依る數の釣合不均衡にして然かも女子人口の男子人口よりも多き所に在つては、女子

は結婚難に陥るを避け難く、其爲めに又多く企業労働に従事するに至る事情あることも、之を認めなくてはならぬ。此の男女人口の不釣合とそれより来る女子の結婚難と、爲めに生ずる女子労働者の増加とは頗る注意す可き現象と謂ふ可きであつて、女子労働問題の原因としての女子労働者増加の事實を致ふるに就けては見遁してならぬ所である。

要するに右等の如き事由に依りて女子にして家庭外に於ける雇傭労働に従事する者の漸次増加し來れるの事實あるに加へて、其の労働の條件は勞賃に於ても、労働時間に於ても、労働保護及び救済の設備に於ても、男女を問はず一般的に良好ならざるものあり、特に又女子労働者は女子たるが爲めに男子労働者よりも其の待遇の劣れるあり、更には又女子には女子特有の健康上の顧慮を必要とするものあるが爲めに、一方に於ては男子労働者と共通の問題として、他方に於ては女子労働者に特別なる問題として労働條件の改善に關して種々の要求の提出せらるるに至り、茲に女子労働問題といふ大いなる社會問題の表はれ來らざるを得ざることとなつた。而して女子労働問題は一般労働問題に於けるが如く、其或者は現狀の下に於ける労働に關する雇傭條件の改善に向けられて居るけれども、又其或者に至つては進むで現今の經濟組織の根本に觸れ、其の改造の希望に向つて居るものもある。其の何れの傾向が重きを爲すかは固より國々に於ける實際事情の異なるに依りて異り、之を概論するが出來ぬけれども、そが動もすれば社會主義的思潮に觸れ其の運動が社會主義運動と關聯し來らんとするの勢あるは之を否認し難き所である。更には又當初女子労働問題は無産者階級に關する問題たる乍らも、其中に在りては比較的優良の地位に在る

所謂熟練労働者に關する問題たり其の問題は主として此等の者に依りて行はれたるもの、近くは問題は一般的となり、熟練者たると不練熟者たるとを問はず、又労働の種別如何を問はず、苟も労働者たる限りは之を一纏にして考へたるが上の問題たるに至り、漸次階級の問題たらんとするに至りつつある。而して又當初女子労働問題は同じ労働問題たる乍らも何となく女子労働者にのみ關する問題として、何となく對男子労働者の問題たる趣があつたが、近時は漸次に其の色彩の薄らぎて、同じく労働問題たるからには多く男女の區別に杭泥す可きにあらず、男女共に等しく之れ労働者として利害を共通にするものなれば、其の問題は一如の問題たり其の運動は共同の運動たらざる可らず、つまりは、労働者といふ一個の階級のソリダリチーの爲めに其の利益増進の爲めに其の階級としての解放の爲めに、完全なる階級意識の下に男女一致して事に當らざる可らずとせらるるの風潮が漸次強きを致しつつある。然かも此の風潮の強まり來り女子労働運動が一般労働運動と合體せんとするに至り、又そが大いに社會主義化し來れることは、女子労働問題をして更に一層意義深重なるものたらしめ、又女子労働運動をして大いに發展するを得せしめたやうである。何れにしても問題本來の意義よりして之を致ふるも、問題の起原よりして之を致ふるも、女子労働問題が一般婦人問題に比し、又は其中に在りて、頗る切實深刻なるものたるの否み難きと同時に、それが元來一の重要な社會問題として社會主義的傾向に合致す可き本性を有し、之と合致するに依りて甫めて其の眞面目を發揮し得可きものなることは、能く好く之を了解せなければならぬ。(未完)